

## 第4章 問診(四診)

## 3 疼痛

## ① 疼痛の性質

疼痛を含めた局所的な反応の状態は八綱弁証や気血津液弁証の弁証名と同じ言葉を使用して表現されるが、弁証名とは表す意味や範囲が異なる。そのため、局所的に実の反応があるからといって八綱弁証が実証であるとは限らず、局所的に虚の反応があるからといって八綱弁証が虚証であるともいえない。

しかし、疼痛を起こす病因や病機が異なれば疼痛の性質が異なることから、局所の反応は証を立てるための情報の一つとなる。

## ① 虚実と痛み (表 4-1、図 4-18)

㊟拒按<sup>きよあん</sup>

押さえると痛みが増強するため、触られることを拒む。

[八綱弁証] 実の痛み。

⇒ 外邪の感受、気滞血瘀、痰濁凝滞、虫積、食積などにより気血の運行が滞って生じる不通による痛みで、押さえると滞りがひどくなり痛みが増強するために触られることを拒む。また、不通の先は不栄であるため、不通の程度によっては拒按ではあるが喜按でもある「イタ気持ちいい」感覚が生じる。

㊟喜按<sup>きあん</sup>

押さえると痛みが和らぎ、楽になるため、触られることを喜ぶ。

[八綱弁証] 虚の痛み。

⇒ 気血不足・陰精損傷<sup>いんせい</sup>や局所の気血運行の滞りによって、臓腑や経脈が

表 4-1 虚実の痛みと原因

不通則痛	外邪感受 痰湿凝滞 氣滯血瘀 虫積・食積	経絡阻閉
不栄則痛	氣血不足 陰性消耗	臟腑経絡失養
	氣血運行の滞り	

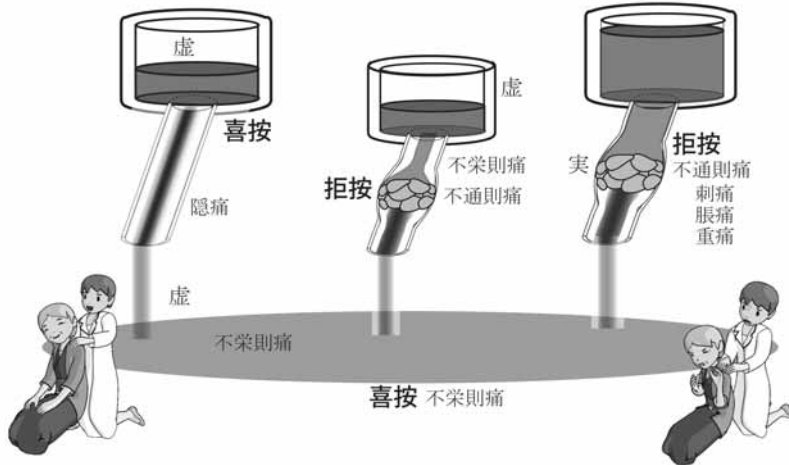


図 4-18 虚実と痛み

栄養されない不栄による痛みで、按ずることで気血が流れ、不栄の部位が栄養されて楽になるために、触られることを喜ぶ。

②実の痛み

実の痛みは不通を起こす原因によって痛みの性質が異なる。

③脹痛 (4-19a)

痛みの部位があちこちに移動する遊走性を示し、膨満感を伴う痛みを脹痛という。胸脇部や腹部に多く出現する。中焦の寒凝氣滯かんぎょうきたいや食滯胃脘しょくたいいでは胃脘脹痛となり、肝鬱氣滯では胸脇脹痛、肝陽上亢かんようじょうこうや肝火上炎で気逆する

と頭部脹痛として現れる。腹部の脹痛はゲップやオナラで軽減する特徴がある。

〔八綱弁証〕 実証。

〔気血津液弁証〕 気滯証。

⇒ 気は動いて止まらないものであり、停滞しているようにみえても動いている。そのため、停滞部位では張り感を伴う痛みが起こる。

#### ㊦ 刺痛（4-19b）

痛みの部位が固定して動かず、針を刺したようなチクチクとした感覚を伴う痛みを刺痛という。胸脇部、少腹部、胃脘部に多く出現する。

〔八綱弁証〕 実証。

〔気血津液弁証〕 瘀血証。

⇒ 物質である血が結晶化したかのようなイメージで停滞するため、阻滯部位では刺されるような痛みを生じる。

#### ㊧ 重痛（4-19c）

痛みの部位は固定して動かず、重い感覚を伴う痛みを重痛という。頭部、四肢、腰部によくみられる。

〔八綱弁証〕 実証。

〔病因弁証〕 湿病証。

〔気血津液弁証〕 湿痰証。

⇒ 湿邪が気血の運行を阻害することによって起こる。湿は粘滯性と重濁性の特性をもち、一定部位で滞りやすく、滞る部位では重い感覚を生じる。また、湿が滞る部位は浮腫や張り感を伴うことが多い。

#### ㊨ 絞痛（4-19d）

締め付けられるような痛みを絞痛という。

〔八綱弁証〕 実証。

⇒ 湿痰、瘀血などの有形の実邪が気機を阻害する程度が強いときに起こる。回虫が動くと脘腹部に絞痛が起こり、石淋（淋菌に基づく疾患で陰莖の中が痛み、小便が出ず、小腹がつっぱって痛み膨張し、小便から砂石が流れ出て悶絶する）では小腹部に絞痛が起こる。心に瘀血が阻滯す

3 疼痛

ると真心痛(狭心症に類似した痛み)となる。

第4章 問診(四診)



図 4-19 実の痛み

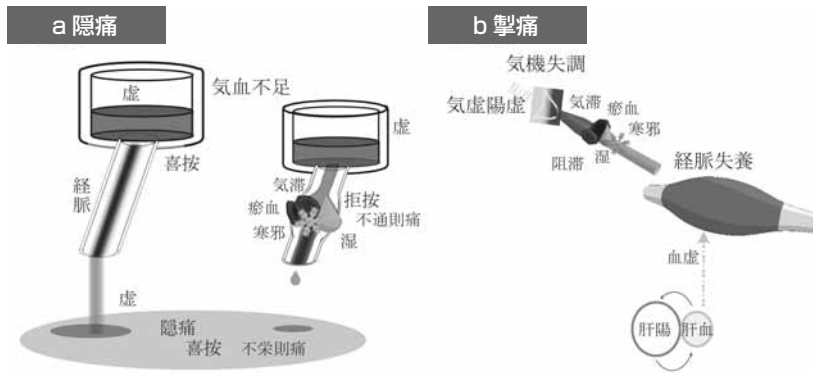


図 4-20 虚の痛み

### ③ 虚の痛み

#### ㊤ 隠痛 (図 4-20a)

疼痛は激しくなく、我慢できるが持続する痛みを隠痛という。頭部、腕腹部、腰部によくみられる。

[八綱弁証] 虚証。

⇒ 気血不足や陰寒内盛で気血の運行が滞った先の領域で感覚する。

#### ㊦ 掣痛 (図 4-20b)

引っ張られるような痛みを掣痛という。

[臟腑弁証] 肝病証、肝血虚証、肝陰虚証。

[その他] 経脈・経筋失養。

⇒ 筋脈や経筋の失養あるいは筋脈阻滯により失養となっている領域に起こる。肝は筋を主り、足の厥陰経筋は肝病と関係が密接である。

### ④ 寒熱と痛み

#### ㊤ 灼痛 (図 4-21a)

灼熱感を伴い、冷やすと楽になる痛みを灼痛という。逆に温めると悪化し、喜冷拒暖を訴える。両脇部、腕部によくみられる。

[八綱弁証] (部分的な)熱証。

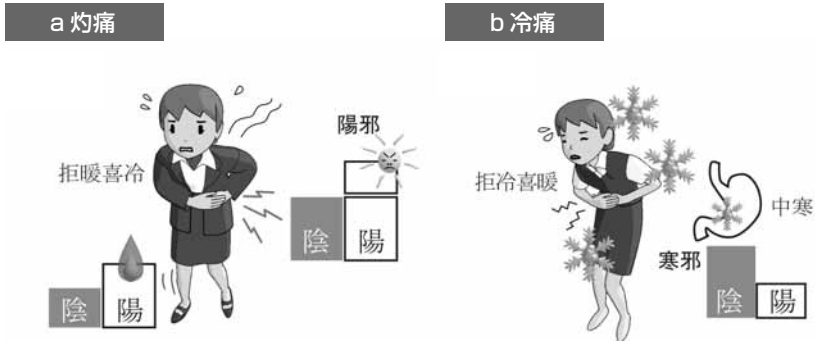


図 4-21 寒熱と痛み

⇒ 火邪の絡への侵入や陰虚のために、陽熱が盛んとなっている部位に起こる。

㊦冷痛 (図 4-21b)

冷感を伴い、温めると楽になる痛みを冷痛という。温めると楽になり、冷やすと悪化するために喜暖拒冷を訴える。頭部、腰部、腕腹部によくみられる。

[八綱弁証] (部分的な)寒証。

⇒ 寒邪による絡の阻害や陽気不足のために、臟腑経絡が温養されないと起こる。

㊧ 痛みの性質と弁証 (図 4-22)

痛みの性質によって、局所の寒熱虚実を把握する。温めると軽減し、冷やすと増悪する痛みや冷痛は寒証の痛みであり、冷やすと軽減し、温めると増悪する痛みや灼痛は熱証の痛みである。喜按を伴う痛みや隠痛、掣痛は虚の痛みであり、拒按を伴う痛みや絞痛、脹痛、刺痛、重痛は実の痛みである。特に実の痛みは病因の性質を脹痛は気滯、刺痛は瘀血、重痛は湿痰などと反映するため重要である。



図 4-22 寒熱虚実と痛みの関係

③ 疼痛の時間による分類 (図 4-23)

痛みの時間的変化は、発作的あるいは持続的、一定の強さで持続あるいは間欠など様々ある。これらの違いも、臓腑経絡を阻害している正気の程度や病邪、病産物の違いを反映している。

㊶ 卒痛そつう

突然、発作的に痛み出す激しい痛みのことを卒痛という。

[八綱弁証] 寒証、実証。

[病因弁証] 寒病証。

⇒ 凝滯性をもつ寒邪により経絡が阻害され、気血の運行が滞って起こる。

㊷ 持続痛

痛みが一定の強さで継続することをいう。